

ココロスイッチ

峰 ユーイチロウ

「翔子はわかめちゃんの声優になりなさい」

父の口癖だった。食事のあとや何かのきっかけで話しているとき、話題に困ったときにそう言った。

「何で？」

「サザエさんはずっと続いているだろ。父さんの子供のころからやっているからな。わかめちゃんの声優になれば、一生安泰だ」そう言って、笑いかける。

当時のわたしは、その父の提案に疑問を浮かべていた。声優という職業にとっても曖昧なイメージを持っていたし、それこそわたしがわかめちゃんの声の吹き替えをやっているところなんて、想像もできなかったからだ。

わたしは今でもたまにサザエさんを見るたびにその言葉を思い出す。父が見ていたわかめちゃんと、わたしが見ているわかめちゃん。わかめちゃんは何ひとつ変わらない。

あるとき唐突に「わかめちゃんの声優になる」と宣言したことがある。なぜそんなことを言い出したのか自分でも分からない。ただ蟬の幼虫が何年もかかって成虫になり、地上に出るときのように、雛鳥が親鳥の元を離れるときのように、満を持して言い放った。

しかし父は「やめたほうがいい」とこちらを論ずるような態度でそう言うのだった。

「え。でも、いつも言ってるじゃん」

「いいかい、わかめちゃんの声優をやっている方はもう何十年も務めているんだよ。わかめちゃんの声優になるにはその人と争わなければいけない。勝つのは難しいよ」

父の言葉に呆然としながらも、わたしはずいぶん納得した思い出がある。確かに難しいよね、と。

要するに父はその場の思いつきで、何かを言い出したり、やらかしたりした。その行動が良い方向にも悪い方向にも働いた。嫌な思いもしたけど、今から考えればそれは刺激的な毎日だったかもしれない。少なくとも、現在の生活からすれば。

父とは血が繋がっていない。わたしは母の連れ子だったからだ。それでもわたしは父になついていた。

夕飯のあと、父とはよく散歩に行った。物心がついた頃には、それが日課になっていたので別段、苦でもなかった。

近くの河原を、二人で歩いた。幅の広い、大きな川に橙色の太陽がゆらゆらと浮かんでいるのが、まるで太陽がそこにも存在しているかのように不思議だった。近くまで下りて石投げをした。

「見ておきなさい」そう言うなり父は手ごろな石を拾い上げて、ピッチャーのサイドスローのような動作で石を投げるのだった。そうすると石は命を与えられたかのようにびよんびよんと水面をととても遠くのほうまで跳ねていく。

「すごいだろ。これの全国大会があったら、父さんは優勝だな」何回も殊勝な顔つきで頷きながら、父は言った。

「翔子もやったらいい」

わたしも挑戦するのだが、父のようにはいかなかった。いつも二回か三回か跳ねて、水中に沈んでいってしまう。

帰宅する途中に、犬を飼っている家があった。丸っこい体格の柴犬で、よくわたしに吠えた。わたしは勝手にその犬に「シャラップ」と名をつけていた。アメリカのホームドラマで子どもたちがうるさく騒いでいると、ヒステリックに母親がそう叫んでいて、ぴったりだと思っただけである。なぜ自分に吠えるのかという疑問と、鳴き声が耳にキンキン響く不快さでうんざりしていた。

その日もシャラップは吠えてきた。いつもは素通りするのだが、何を思ったのか父はそのとき吠え返した。「わんわん！わんわん！」意外によく通る声だった。

シャラップは一瞬きょとんとした表情を見せたが、すぐに吠え返した。犬の首輪に繋がれている鎖が、ガチャガチャなってるさかった。なんとも奇妙な光景だった。人間と犬が吠えあっているのだ。それまであった感情もどこかへいって、今度は恥ずかしくなってきた。

「お父さん、帰ろう」

父はこちらの言葉に耳を貸そうともしなかった。わんわん、と吠え続ける。
「いいか、翔子。こういうのはちゃんと言って聞かせないとだめなんだ」シャラップから目を離さず、言う。
すると、突然犬の鎖が外れた。何の前触れもなく、いきなりだ。柴犬は吠えていたときの勢いそのままに父に襲いかかる。父は「わ」のところで口の動きを止めて、走り出す。猛烈なスピードだった。そのまま父はどこかへ走り去ってしまった。

「ただいま」
「あ、お帰り」
「あの柴犬俺がきつく言っておいたから、もう大丈夫だぞ」
「うん、でも……」
「なんだ。まだ何か不満でもあるのか？」
「それ」
ワイシャツはぼろぼろに引き裂かれ、血がそれに滲んでもいた。
「これか？こんなものたいたことないよ」
そう強がっていたのだが、寝る前に盗み見た父は顔をしかめて絆創膏を貼っていた。多分、あれは夢の中の出来事だ。
それ以降、あの柴犬は、私が前を通っても吠えなくなった。それどころか、これはあくまでも主観的な意見だが、ばつの悪そうな面持ちで私から顔を背けるのだった。

＊

明人の泣き声以外で目が覚めたのは久しぶりだ。テーブルにじかに顔をつけて眠っていたからか、頬骨が痛む。明人を起こさぬように椅子からそっと立ち上がり、部屋の片隅に据えつけられたベッドに向かう。
なんてかわいい寝顔だろう、心の底からそう思う。私はこの子をどんなことがあっても守らなければならない。
それでもなぜだろう明人が泣き出すと、私は水風船を懐に抱いている錯覚に襲われる。大事に大事にしなければならないのに、私は無性にそれを割りたくなる。
なんで泣きやんでくれないの。こんなに私はあーくんのことを愛しているのに。あなたも分かるでしょ？
明人は泣き続ける。零れ落ちる水滴だけが、私の心情に呼応したかのようにぼたぼたとわたしの腕に、シーツに吸い込まれていく。
小さな頬へ人差し指を、野に一本だけ咲くタンポポに触れるように、そっと伸ばす。どこまでも入っていきそうなそんな感触は、指を優しく包み込んでくれる。
今日は夜泣きしないだね。小さくつぶやき、何回かその動作を、確認をするように繰り返す。

＊

わたしは母が嫌いだった。何か気に入らないことがあると、それも小指をダンスにぶついたり、見たかったテレビドラマが野球中継で遅れてしまったということだったのだが、わたしの二の腕をつねったり、頭をはたいたりした。
だからわたしは母がダンスに小指をぶついたり、野球中継の延長があったりすると、こそこそ母から逃げだした。それでも母は目ざとく見つけ、つねったり、はたいたりするのだった。
父はこの事実気づいている様子はなく、相変わらずわかめちゃんの声優になることを薦めたりしていた。父に打ち明けることはできなかった。しかしわたしはそうしなかった。敗北を見たくなかったからだ。そのことを訴えていれば解決してくれたに違いない。でも、もし父が母の言いなりになってしまったら？ありえない何の根拠もない不安が、頭の上に降りかかってきて、怯えていた。
思えば、そのときの父は最後の頼みの綱だったのだ。その綱をわたしは我慢という補強剤で切れないように努力していて、黙っていたのかもしれない。

ある日、母がこう言った。「離婚するから」
「え？」あまりの唐突さにわたしは戸惑うばかりだった。そのとき見ていた教育番組はいまだに覚えている。大勢の子どもたちが体操をする青年のもとに集まり、運動とも遊びともつかない行動をしていた。
なかには集団から離れている子どももいて、あの子は参加しなくていいのかな、お母さんから怒られるんじゃないのかな、などといらぬ心配をしていた。
自分ならどう行動するだろうかということも考えたりした。周りの子どもたちと同様に無邪気に走り回るのか。それとも距離を置いて親をがっかりさせるのか。
「離婚するって言っているのよ」タバコから上る煙を、しかめっ面で見つめながら「あんなだめな男とはね。あ、あとあんたは私が引き取ることになったから」あ、あとバターでも買っておこうか。そんな物言いだった。
夢であればいい。はしゃぐ子どもたちを眺めながら生まれて初めて、切に、そう願った。そもそも離婚する、という台詞は父の口から発するべきだと思った。両親の間に何が起こったのかは知らないが、少なくとも「離婚」という単語は母から出てはいけない。
「すぐに迎えに行くから」別れる際に父はいつもと変わらぬ優しい口調で、言った。わたしは壊れた蛇口のように、涙を流すことしかできなかった。嘘でもいいから父に、一緒に暮らそう、と言ってほしかった。
父になついたのは、こんな母親だったからなのかもしれない。
そして母とわたしの二人の生活が始まった。

*

朝のスーパーは忙しい。レジへの入金、売り出し商品の確認、買い物袋の補充。それらを朝礼の前に済ませておく。朝礼が終わるといよいよお客が、店内に入ってくる。今日は平日なので客もまばらだ。スーパーに来るのが生きがいのように目を輝かせている者や、こんな所に来たくはないのだが、来ざるを得ない自分の生活を呪っているように、思いつめた表情の婦人も見受けられた。
早速お客がやってきた。入り口に近いレジにいるので、冷たい風が自動ドアが開くたびに、体に吹きつけてくる。
レジ打ちにはコツがある。速さと同時に美しさが求められるのだ。苺や卵など傷つきやすい物は脇にどけて最後にかごの中に入れる。また惣菜などの暖かいものはほかの商品と一緒にすると冷えてしまうので気をつけなくてははいけない。他にも立てていい物や横にしなくてはいけない商品もある。なかなかレジ打ちは奥深い。
その日もわたしは、かごの中にできる世界をどう組み立てるかに奮闘していた。すると、名物おばあさんがその姿を現した。
「おはよう、おはよう」店内にいるすべての客に挨拶をしている。
戸惑う者や、私にも想像することができない様々なことを思いやっ、心なしか潤んだ瞳で丁寧に挨拶を交わす者、あからさまな軽蔑の眼差しを向ける者もいた。それでも挨拶おばあさんはだれかれ構わず、おはよう、と口にするのだった。
今度はサービスカウンターで何やらチーフと会話している。
「今日はお砂糖が安いのねえ」
「ええ、そうなんですよ。いつもありがとね、おばあちゃん」
商品を流しながら、ちらりと今日のチラシに目をやるが、砂糖は売り出しでもなんでもなかった。チーフは毎日こんなやり取りをやってるのだから、たいしたものだ。
「おい、ぼさっとしてないで早くやれよ」
「申し訳ございません」
すぐに取り掛かるがそのお客のかごの中には、卵が三パックも入っていた。
「お客様、恐れ入りますが卵はお一人様一パックとなっております」
「ああ？友達がいるんだよ、友達が」そう言うお客の顔は心なしかゴリラに似ていた。体格が良くて眉毛が太い。さぞ彼の友人達は、あだ名に困らなかったことだろう。
「それでしたら、お友達をこちらまでお連れいただかないと……」
このような場合の対応が一番気を使う。非はお客の側にあるのだが、それをはっきりと態度に示そうものなら余計に怒らせてしまう。腰

は低く、低く、だ。確かに研修のときに教えてもらった七三分けに角ばった眼鏡をした中年の男性は、腰が低かった。
「いいですか、客なんてねえ、こちらがへいこらしていれば、おとなしくしてるんですよ。それを何か勘違いした主婦のパートが、曲がりくねった正義を持ち出して立ち向かおうとするから、話がおかしくなるんですよ。へいこらしていればいいんですよ。へいこらしていれば」そこで彼は眼鏡を神経質に持ち上げた。「でもねプライドは持ってなくちゃいけませんよ。私はこんなに嫌な客にも笑顔で対応している、この客よりもどんなにか私はまっとうな人間だろうってね。腰は低く、志は高く、ですよ」
「早くしろってんだよ！ たったの卵が三個だろうが。もういい店長呼べ、店長を」
さらにゴリラ似の男はヒートアップしていた。怒りの度合いと比例して、ますます男の顔はゴリラのそれに近づいていた。今ここで笑えたらどんなに幸せなことだろう。
「かしこまりました。そうしましたら店長を呼んでできますので、少々この場でお待ちください」
河村さんだった。冷静に、淡々と言う。私と二、三歳しか離れていないが、私が抱くどこからか滲み出る落ち着きや、誰でも受け入れてくれるような寛大さといった大人の要素を、無理するわけでもなく持ち合わせていた。
まさか本当に呼ばれるとは思わなかったのだろう、ゴリラは動揺の色を隠しきれなかった。本物も、メスが奪われたときには同様の表情をすするに違いない。
「帰る」大きな足音を残し、ゴリラは山に帰っていった。
河村さんの対応を見て、もう一つ思い出した。
腰は低く、志は高く、毅然と対応、だ。

社員食堂にいる人はまばらだった。今日のメニューであるカレーの匂いがいやがおうにも食欲を誘う。誰でも見れるように高いところに設置されたテレビからは、最近頻発している奇妙な事件の特集が放送されていた。
その事件とは誘拐だった。といっても無差別に子供をさらうというわけではない。犯人は車のなかに置き去りにされている子供を連れて行くのだ。しかもそのあとは警察に届けられて、誘拐された子供たちは全員無事だったそうだ。
自然とパチンコ店での犯行が多くなった。子供が戻った直後の親たちはそのまま車の中に子供が居たら死んでいた可能性もあったため、一様にぼつが悪そうな顔をしてインタビューに対応していた。
「変な事件ね。ほんつとに嫌気が差すわ」
見やると河村さんが、あまり熟していないバナナを食べたときのような顔をしている。
「そうですね。やっぱり誘拐はいけませんよね」
「違うわよ」
「え」
「親のほうよ。炎天下に車を放置したら車内は外より何度も高温になるのよ。犯人は子供たちの命の恩人よ」
「確かに親もいけないと思うんですけど、命の恩人は言い過ぎなんじゃ……」
「いいえ。犯人はヒーローよ。誰か分らないけど頑張れー！」
ルーが付いているスプーンを高く掲げ、河村さんは顔も見えない誰かにエールを送っている。
「……。あ、さっきはありがとうございました」
「別に、私は何もしていないわよ」
「でも、あんなにきちんとお客様に対応できるのはすごいですよ」
「そう？ でも今日店長いなかったから、賭けだったのよ」そう言って笑いながら「でもさあの客ゴリラに似てなかった？」
「河村さんもそう思いました？」
「だってほんとに似てるんだもん。あっ、ゴリラがスーパーに来てるっ、て」
「卵三パックも買って何するつもりだったんでしょね」
「さあ……オムライスとか？」
「えー。食べれませんよ」
「茶碗蒸し」

「何人前できるんですか」

「目玉焼き」

「なんか気持ち悪いものができそうですね」

河村さんとの会話はいつもこんな感じで進行していく。河村さんのボケにわたしがツッコミを入れる。河村さんも自身の発言に無理があることが分かっているのに、ボケてくるから困ったものだ。律儀に返すこちらも悪いのだろうが。

「いいじゃん黄身のほうが白いとこより多くなるかもしれないし」

「どういうことですか？」

「普通の目玉焼きってさあ、なんか黄身の面積が少ないと思うんだよねえ。だってぶっちゃけ黄身がメインでしょ？なんで白いところが多くなるかなあ」腕を組み、思索する。真剣だ。

「目玉焼きはそういうものなんですから」

「そういう先入観がいけないのよ。要するによ、白いところに黄身が囲まれている目玉焼きじゃなくて黄身に白いところが囲まれている目玉焼きを作ればいいのよ」

「はあ」

「よし。そうと決まったら即実行よ。私も卵買っていこう」

とんでもない方向に話が脱線しているようだ。しかも河村さんは動きを止めない。

「明人君、元気？」

河村さんには何度か面倒をみてもらっていた。明人も河村さんを気に入っているらしく、家に遊びに来たときは、ぜんまいが壊れたブリキのおもちゃのように体をばたつかせて喜んでいた。

「ええ、おかげさまで」

「そう。よかった」

「どうかしたんですか？」

「ううん。また明人君の顔見なくなっただけ」端正な顔に一瞬翳りが見えた気がした。何か気になることでもあるのだろうか。「今度また家に行ってもいい？」

「ええ、もちろん」

食堂には私たちしかいなかった。どうやら休憩時間は終わりのようだ。どちらからともなく片づけを始める。

最後に河村さんが綺麗な眉をハの字に下げて少し思索したあと、言った。

「ねえ、じゃあプリンは？」

＊

母との生活が始まり、父との離婚を待っていたかのように虐待も始まった。最初は煙草の火を押し付けられた。手を放そうとしても母は無表情でわたしの手をきつく握り締め、高熱を手のひらに押し当てた。皮膚が焼けた悪臭が鼻をつく。焼いてはいけないものの匂いだと思っただけだ。

通知表やテストの成績が悪いときなども煙草はわたしを襲った。いや、良し悪しは関係ない。あるときわたしが百点をとったテストを見せたときがあった。意気揚々としたわたしに母はこう言い放った。「私の娘が百点取るなんて。調子に乗るんじゃないわよ」。要するに痛めつけただけなのだ。渡されたものを手に取り、しかめっ面で眺める。すると母は小さく舌打ちをして火を手のひらに向けるのだ。

一番つらかったことは殴られることだった。火傷ももちろん嫌だったが、殴打されてできた傷は腫れるし、じんじんと疼いた。母はボクサーのようにファイティングポーズをとりわたしに殴りかかり、吹き飛ばすさまを見て、けらけらと笑った。吹き飛ばして何かを壊したり落としたりするとまた殴ってきた。

夜には知らない男の人を連れてくる。無精ひげが生えた身なりがひどい人だったり、七三に眼鏡をかけた、真面目が現実に存在しているような人もいた。

わたしはどうしたらいいか分からず押し入れに隠れ、ただただ息を潜め、男が帰るのを待っていた。落ち着かない暗闇のなか、音だけが実

体を伴って囁きかけてくる。

男がいるときの母はわたしを殴るときとは違って、猫の発情期のときのように甲高い、耳障りな声で甘えるのだった。そんなときは急いで耳をふさぎ、父との思い出を頭に必死に浮かべる。散歩。シャラップ。石投げ。少なすぎるファイルの中からも懸命に手繰りよせたそれは、私を慰めてくれた。

マッチ売りの少女が使うそれのように真っ赤に燃え上がってはすぐに消えてしまう。急いで次のマッチを擦り、再び私はそう遠くない過去の明かりに体を預けていた。

そうしていることで必ず思い出すことがある。父が雷が怖くて眠れなかったときにしてくれた話だ。

「雷はな、神様が悪い人たちに落とされているんだよ。だから怖がる必要はどこにもない」いつもの笑顔を向ける。お腹のあたりに置かれた父の手のぬくもりが、布団を通して伝わってくる。

「家には落ちてこないの？」

「落ちてこないよ。悪い人なんていないだろう？」

母のことをそれとなく言ってみたのだが、父には分からなかったらしい。

「でもさ、もし悪い人がいるところに雷が落ちてこなかったらどうするの。全部の悪い人たちに落とすわけじゃないんでしょ？」子どもの意地悪な質問に父は困ったに違いない。

「神様は本当に悪い人がいる場所に、雷を落とすんだ」

確か父はこう言ったと思う。

いつもそこで思い出は停止し、現実に戻ってくる。もちろん父が助けに来るはずもない。本当に悪い人とはどういう人のことだろう。雷が落ちてこない母は悪い人ではないのだろうか。そんな考え事ばかりをしていた。

ときどき聞こえてくる母の声はいつしか、喘ぐような女のそれに変わっていた。

＊

歩道に出ると、陽はもう落ちようとしていた。だが暗くなる気配はまだまだない。

これぞ夕焼け、と言うような見事に橙色で染まった空だった。もし映像だけの辞書があつて夕焼けを調べたら、きっとこの景色が出てくるに違いない。

仕事が早めに終わったので思わぬ時間ができてしまった。普段は仕事が終わったあと、まっすぐ明人を預けている託児所に向かい、途中で買い物をしたあと帰宅するのだ。

逡巡したあとゲームセンターに行くことにした。駅からすぐのいい立地条件であるにもかかわらず、そこは経営に苦しんでいるようだった。店内は薄暗くて、十年前の設立当初からゲーム機は変わっておらず、ピンボールや一昔前のキャラクターが景品のUF0キャッチャーが所在なげに点在している。

そんな光景を見ていると繁盛していないのも当然のことかと思わず納得してしまう。客も数えるほどしかおらず、全員が少しもおもしろくなさそうにゲームをしている。楽しむというよりもただ簡単な単純作業をこなしているという感じだ。

中高生が訪れたら数秒で飽きて帰りそうな場所だが、わたしにはこちらのほうが快適だった。様々な楽器がそれぞれに弾んでガチャガチャしているよりも、静かだがまっすぐに心に入り込んでくる音楽が好きだ。

店の奥まったところにあるパンチングマシンのもとへ向かう。硬貨を投入し無心に機械に備え付けられたクッションに、拳を打ち込む。ビリビリと心地よい衝撃が右腕全体に流れる。

何度も何度も拳をぶつける。回数を重ねるごとに汗が全身をつたう。息も荒くなる。

「さまになってきたねえ」

いつもの飼い犬をめぐるような柔らかな笑みを絶やさず、店長の浅井さんが声をかけてきた。といっても店員はこの人だけなのだが。

浅井さんの話では父親の代は相当お客が入っていたらしい。それが自分の番になったら全然入らなくなった。父親ができて何で自分ができないんだろうねえ、と浅井さんは後悔など微塵も感じさせない口調で、しみじみと嘆いたりする。

「前は上半身だけで打っていたけど、今は腰の回転をうまく使っている。いいよお」

そう言ってパンチをするジェスチャーをしてみせる。

「ボクシングやってたんですか？」

「ううん、やったことないよ。うちの父がやっててねえ、なんか頼んでもないのに教えてくれて。だから多少のことは分かるんだよ。あ、気にしないで続けて。見てるだけだから」

「そうだったんですか？」

「そう言うなり私もパンチを打つ。だんだんと腕力がなくなってきた。それでも褒められたからかバンッ、バンッと小気味よいリズムが生まれだす。たまにフックも繰り出したり。」

「……」

「……」

「あの」

「はい？」

「何か、見られていると気になっちゃうんですけど」

「気にしないでください」

「はあ」

「気になるものは気になる。今まで意識されなかった客観的な自分が、ほてった頭でぼうっと浮かび上がる。やはり一人の女性がパンチングマシンに向かってる姿は周囲からすれば奇妙なのだろうか。」

「浅井さんは変わらぬ笑みで見つめ続けている。」

「あの」

「いやーほんとに上達したよねえ。だから機械が調子悪くなったのかな。なんかパンチしても画面が反応しないもん」

「ファイティングポーズの姿勢のまま身体が硬直する。そういえばパンチの威力を示す数値が画面に表示されていない。かんかんかーん。試合終了のゴングが頭の中で響き渡る。」

「いいんだよお、元気なことは。浅井さんの言葉がとても遠くに聞こえる。」

「私は再び無言で拳を打ち込む。」

＊

母との生活は何の滞りもなく継続していた。男を連れ込み、わたしは押入れに隠れ、男が帰ったら今度は私を殴る。慣れとは恐ろしいものだ。私は虐待を生活の一部として受け入れようとしていた。されるがままに煙草を押しつけられ、殴られ、罵倒される。

「ほら熱い？熱いって言いなさいよ。黙ってないでさ」

「そう言って煙草を腕に押しつけてくる母の顔は、まるで一番の好物を食べる直前のように恍惚の症状にまみれていた。口角が吊り上り、目が細くなる。本当に、うれしそうだった。」

「それを私は無表情に見つめる。嫌だといって抵抗しない。熱いからといって声も上げない。ただそこにある現実として受け入れる。虐待生活で私が考えた、いや自然と生み出された一番の対処法だった。」

「いつしか涙も出なくなっていた。泣き虫の私としては喜ぶべきことだったが、そのときは泣きたくて泣きたくて仕方なかった。涙で何もかも見えなくなって、ついでにその涙が乾いたら、すべてが幻のようにどこかへ消えてなくなればいいと思っていた。」

「けれどそんなことは起こるわけもなく、母は私の眼前に悠然と存在していた。」

「その日も母は私を傷つけることに腐心していた。」

「煙草の火で、腕に何やら三角とも四角ともつかない模様を描いているらしかった。その傷があとで私を苦しめることになるのだが、このときの私は、まだかなあ早く終わらないかなあ、などと痛覚も危うくなった身体状況で今にもちぎれそうな意識の綱の上を渡っていた。」

「終わったあとで恐々と見る右腕の付け根にあるそれは、正三角形を何個も組み合わせたような幾何学模様で私を混乱させた。これで終わりのような気もするし、まだまだ未完成のようにも思える。いやいやこれは別に作品ではなくて母が適当に焼き付けて楽しんでいるだけな

のだ。そんな考えも浮かんで来て、私は鏡だらけの迷路に迷い込んでしまったようだった。

幼い頃に父と二人で行った遊園地の一施設。すべての壁に鏡が張ってあってどこが通路なのかも出口なのかも判然としない。すべての鏡には私が写っていて、さらに焦りを募らせる。

今回写っているのは母だ。どこを向いても不気味に笑っている母がいる。

「あーほら、ずれちゃったじゃない」あまりの熱さに身体をびくつかせた私に母が口をとがらせる。そのあとハエを追い払うかのような軽い素振りです。

一瞬の快適なほどの浮遊時間のあと、背中に衝撃を伴った鈍い痛みが伝わってくる。

「新記録！よく飛んだわねー」あまりの痛さで息ができない私を尻目に母は表情を緩め、ガッツポーズする。

そのとき呼び鈴が鳴った。ピンポーン、と間延びした音が室内に響く。まるで記録の更新を称えるかのようだった。

母は小さく舌打ちし、途端にきつと私を睨みつけた。黙っている、ということなのだろう。

呼び鈴はなおも鳴り続ける。よほどの用事なのだろうか。

私は黙ってそれを聞き続ける。ピンポーン、ピンポーン、お客さんですよー。

やがて呼び鈴は何かしらのリズムを刻むようになっていた。最初はなんだか分からなかったが、頭の中にぼんやりと映像とともにその音楽が何なのか映し出される。

サザエさんだ。サザエさんのエンディングに流れるあの曲だ！

ポポンポポン、ポポンポポン、ポポンポポン、ポーン。

私はすぐに誰がこんなことをしているのか思い当たった。父だ。父しかいない。

いよいよよくしゃくしゃくになった古新聞のような顔になった母は、あーうるさいんだよ、と毒づきながらドアを開けた。

果たしてそこには父がいた。別れたときとなんら変わらない父が、いる。ズボンもワイシャツもしわだらけだが、大病が完治したかのような、とても爽快な顔つきをしていた。

「あ、あんた何しにきたのよ」面食らいながらも、母は父に噛み付いた。「裁判の結果聞いてなかったの？もう私に近づいちゃいけないのよ？早く帰んなさいよ」

「そんなことはどうでもいいんだ。私はただ翔子に迎えにきただけだ。帰るぞー」平然と告げる。

「何わけわかんないこと言ってるのよ。警察呼ぶわよ！」母の剣幕をまったく意に介さない父の態度がさらに怒りのパラメータを上げる。

「翔子、そこから動くんじゃないわよ！」そう叫んで父の方にもどした母の顔がすぐにまたこちらを向いた。

父が母を殴ったのだ。母は綺麗な弧を描いて吹っ飛びわたしの隣に着地、いや激突した。私と体重差があるため衝撃が大きかったのだろう、食器棚にぶつかったあと頭にやかんが追撃する。

「帰るぞ、翔子」両手を広げ、わたしににっと歯を見せる。

突然のことに思考が回らない頭で、これだけは理解する。

雷が落ちたんだ。

「何であの場所が分かったの？」

「んー？」

「何でもっと早く迎えに来てくれなかったの？」

「んー？」

「そればっかじゃわかんないよ」父の背中で泣きじゃくりながら言う。

「だって、それ言っちゃったらおもしろくないだろ。サンタクロースが、ここまでは飛行機と新幹線と各駅停車を乗り継いで来ました、つて言うか？」

「サンタは新幹線とか使わないよ」

周りでは蝉がわんわん鳴いているなか、わたしたちはゆるやかに続く坂を登っていた。前方に見える景色が蜃気楼みたいにゆらゆら揺れていて、坂はずっと続くのではないかと疑いたくなる。わたしはそれでもいいかな、とほてった頭で思う。

「暑いな」

「暑いね」
ゆっくりと、だが着実に歩を進める。父の歩調に合わせてわたしも背中で左右に揺れる。道の真ん中を歩いているのになぜか車は一台も通らなかった。世界中がわたし達に味方してくれているようだった。実際、信号も一回も赤で止まらなかった。
「さ、家に帰ろう」独り言のように、噛みしめるように、父の声は安堵に満ちていた。

＊

ゲームセンターを出て、明人を預けている託児所へ向かう。
途中で犬に出会った。大きなゴールデンレトリバーが白い息を吐きながら飼い主に連れられて、とてとて歩いている。
犬を見るといつも幸せな気持ちになる。リードという目視できる繋がりではなく、何か別のもっと太い、信頼や愛情という言葉でも足りない関係が飼い主と犬の間にあるように思えるのだ。
わたしは犬に飼い主に見つからぬようにそっと微笑みかける。かわいがってもらえよ。初対面の犬との無言の会話。
言われなくてもかわいがってもらってるよ。たいていの犬は面倒くさそうな顔でそう答える。
明人を預けている託児所は、民家をそのまま使用している。窓から覗くとそこはさながら大家族が住んでいるようにも見える。
十数人の子どもたちがはしゃぎ回り、戦場と化している。対応する人間は三人なのだから大変だ。
先生の一人がこちらに気づいた。窓を開けてくれる。
「こんにちは。明人、いい子にしました？」
「ええ元気になりましたよ」
言葉と裏腹に、わずかなためらいが見てとれた。
「……あの、何かあったんですか？明人が何かご迷惑でも？」
「いや、あの」
「何もないんですよ。ただずっと泣いてたからお母さんと会えなくて寂しいのかなって」
ベテランの先生が後を継ぐ。もういいわよ、と目で合図する。そのあと小声で「ごめんね、若くてまだ慣れていないのよ」とも言った。
「そうだったんですか。すみません」
「謝る事ないのよ。野宮さんとこは母子家庭で大変なんだから、しょうがないわよ。悩みごとがあったらなんでも相談してね」
「はい。ほんとすみません」

明人を抱いて家路を急ぐ。今日はなんだかいつもより重く感じた。
「ずっと泣いてたの、あーくん？寂しかった？」
世界中の赤を集めたような太陽が、山の稜線に沈もうとしている。周りの物はすべて赤く染まっている。私たちも真っ赤に染まっているのだろうか。
「おうちに帰ったらすぐにまんま作るからね」
明人は指を含んで眠っている。のんきなものだ。抱きなおして歩調を速める。やはりこの時期に子どもをどこかに預けるのは、悪影響なのだろうか。
それでも、と思う。それでも私はこの子を守らなければならない。味方は私しかいないのだから。
明人を抱いているため片手で何とかドアを開け、できた隙間から滑り込むようにして中へ入る。寒さが身体にまわりつく。
急いで明人をベッドに寝かせ、エアコンをつける。
さむっ、さむっ、と小声で呟きながら、もそもそと食事の支度を始める。といっても簡素なものだ。
夕飯はスーパーで買ってきた出来合いのもので豚豚にポテトサラダ、ご飯だけが家で炊いたものである。明人は起きてからでいいだろう。
ぼーっというエアコンの稼働音がやけに大きく聞こえる。
久々の静かな食事だというのに、脳裏に浮かんでくるのは自分でも嫌気が差しそうな後ろ向きな考えだった。

父親がいたほうがいいのか。私の考えが甘かったのだろうか。自分の力を過信し、父のもとを飛びだしてみたはよかったものの、現実には予想とはまったく違った形で存在している。
戻りたくはなかった。父にもできたのだ。私にもできるはずだ。絶対に私は明人を立派に育て上げてみせる。
毎日繰り返す自問は、毎日同じ自答に行き着いてしまう。

*

諸積勝人との出会いは高校三年の体育祭も終わって、皆が本気で勉強を開始する時期だった。わたしも例に漏れず、根城を学校の近くにある町立の図書館に確保し、勉強に励んでいた。
学校にも図書館はもちろんあるのだが、暗くて梅雨でもないのになぜかじめじめとしていて、皆がそこに抱くイメージを何倍にもしたような環境がなじまなかった。
わたしはいつも、入って正面に設置されてある机に向かう。目の前の壁は一面ガラス張り、時間の移り変わりを感じることができる。畳が敷かれてある場所もあり、そこでは小学生や老人たちが将棋や囲碁に興じていた。
その日もわたしはいつもの席に座ろうとしたのだが、先客がいた。男の子で自分と同じ制服だった。
自分の席でもなくせにわたしはなぜか理不尽な怒りを覚え、誰なのか少し興味も持った。
輪郭は細く、眉毛が太い。不釣り合いな感じもしたが、長髪がうまくそれらをまとめて、ゆったりと伸びている。覚えはなかった。ここで勉強しているということは同じ学年なのだろうか。
存在に気づいて、こちらに顔を向けてくる。わたしは急いで別の席に座る。

その後も男の子とは椅子とり合戦が続いた。わたしも場所を変えればよかったものの、自分の居場所が奪われたような気がして先に座ろうと早めに来たり、躍起になっていた。
「いつもここ座ってるよね？」
これが彼が初めてわたしに発した言葉だ。そのときわたしは数学の確立の問題に、閉口どころか体中の開いているところすべてが閉じてしまうような、お手上げ状態で四苦八苦していた。
さらに事は進んで、果たしてわたしのこれからの将来に数学はいるのだろうかという根本的な問題を真剣に考えたりしていた。
「あの」
「話しかけないで。わたしは今数学と決別するか本気で考えてるんだから」
「……少なくとも今は必要だと思うけど」
「やっぱそう思う？」
「う、うん」
「そっかあ」
「ここ座ってもいいかな？」
「いいよ」

わたし達はそれから自然と一緒に勉強することになった。わたしは地元の私立大学、勝人は東京の国立大学を目指していた。
学校が終わったらここへ来てお喋りもせず、黙々と参考書に向き合い、閉館時間まで粘って、二人で帰った。休みの日には遊園地やカラオケや、動物園に行ったりした。肉体関係も持った。
こういったカップルは珍しくなかった。受験勉強は孤独な作業だ。そこで簡単な安らぎを求めた男女が付き合う。受験が終わるまでの限定カップルだ。
わたしもそのつもりだった。意識しないまでもそうなるだろうなあ、とうすうす感じていた。
それでもわたしは彼を本気で好きになってしまった。
要するに、恥を承知で言えば、若かったのだろう。初めての彼氏というのもあったし、わたしはとにかく愛や、愛に似たものを、ただ求

めていただけなのかもしれない。

「翔子さ、たまに怖いときがあるんだよね」

新しく開店した喫茶店でのことだ。あの頃のわたし達はとにかくそういうものを見つけると、どちらからとも入ってジュース一杯で何時間も居座り、内装がいいね、とか店員の愛想がいい、などと言いつつあったりした。

「え。わたしが？」

「うん。例えば、なにか物渡すときにさ、差し出すとびくっとするんだよ。そんなに驚かなくてもいいのに」

「そうなの？」

「うん」

真っ先に思い浮かんだのは虐待だ。母による毎日の過酷な仕打ちで、自分でも気づかないうちに、わたしは自分に向けられるものに敏感になっていたのだろう。

「挙動不審？」

「いや、挙動不審まではいかないけど……」

「職務質問？」

「それは警察がやるの」

いつまでもこんな関係が続けばいいと思っていた。けれどわたしの眼前には、昼下がりの蝶のように母との日々がゆたゆたと飛んでいた。

伝えなければならぬのだろうか。そうしたところでわたしの何が分かるというのだろうか。勝人はわたしの過去を知ったところで、動じはしないだろう。むしろ以前よりもわたしのことを大事にしてくれるかもしれない。

一番怖いのはわたし自身だ。ふとした瞬間に事情を知った勝人が憐れむような、悲しそうな視線を投げかけたとき、わたしはどうすればいいのだ。

そうなの、わたしは虐待されたことのある可哀相な人間なの。だからもっと傍にいて。

何よそれ。わたしはもう虐待のことなんか、全然気にしてないんだから。

どんな言葉も、行動も、わたしの心に当てはまる箇所はありそうにない。そんな状況に遭遇したときわたしはいったいどんな顔して、どんな言葉を吐き出すのだろうか。

幸か不幸か、わたしは虐待のことを話す前に勝人にフラれた。いや、彼は気づいていたのだ。

「腕にさ、傷があるよね」

高校の近くに新しくできたファミレスでのことだ。例によって、わたし達は新しいもの好きだった。

「うん」

「あれはもしかしてさ、昔誰かにやられたあと？」

「言えばいいじゃん。虐待されたの？誰に？父親？母親？大変だったね。」

「……」

「最初は、大丈夫だったんだよ。これも翔子の一部分だ。大丈夫だって。なんてことないって」わたしに向けられていた瞳は、いつしか茄子の紫が鮮やかなラザニアに向けられていた。「でもさ、あるとき気づいたんだ。傷を意識している時点で俺はそれを翔子だと思ってないんだって。傷を受け入れようとすればするほど俺は翔子を否定しようとしてたんだよ」

最後のほうは声がかすれていて、あまり分からなかった。でも別れてほしいという言葉は何とか聞き取れた。

悲しくはなかった。存在していたものは、呆気ないな、という思いだった。脆いな。でもしょうがないのだろうな。

これからわたしは何度もこういった別れを経験するのだろうか。冷静に未来の自分を思い描いたりした。

帰宅すると台所のほうから、香ばしい匂いが鼻に飛び込んできた。

「おー、翔子お帰り」父がエプロン姿にフライパンを持って出迎えてくれた。妙に似合っている。「夕飯今できたところだ」

「いい。いらない」

わたしは生涯で一番落ち込んでいるかもしれないというときに、暢気なものだ。

料理は父の担当である。父との生活が始まって、最初の出来事は家事の担当を決めるための家族会議だった。掃除、洗濯、皿洗い、そしていざ料理の担当を決めるときに父が厳かに言った。

「料理は私が担当する」

「え。いいの？」唐突な父の発言にわたしは少し戸惑う。父が料理する姿なんて想像ができなかった。

「ちょっと試したいものがあるんだ」なぜか恥ずかしそうに父は言った。

今思えば最初から有無を言わず、わたしがやればよかったのだ。父が料理を始めてからというもの、食事はわたしにとって試練の場となった。

「オムライスの目玉焼き乗せ」、「うどんの麺で作ったかき揚げうどん」、「ライスライス」。なぜか父はメインとなる食材を使っておかずを作った。

「一番理想的じゃないか。食材一つ買えばいいんだから」さも当然だと言わんばかりに父は言う。

「でもさ『ライスライス』はないんじゃない？ただのご飯じゃん。何がしたいのか分からないよ」

「なかなか奥が深いぞ、それは。食ってる途中で自分で何をしてるのか分からなくなって笑い出してしまうときがあるからな」

「じゃ、作んなくていいじゃん」そう言ってわたしも笑う。要するに楽しければそれでいいのだ。

思い出して暗鬱になりそうになる気持ちを何とか押さえ込んで、わたしは「今日は何」と訊いた。

「今日はな、ステーキだ」

「おー、普通じゃん」

「いつも普通だ」苦々しい表情で、口を尖らせる。

「何かいいことあったの。そんなに奮発しちゃって」

「何を言ってるんだ？」

「え、だってステーキって。肉使ってやるんでしょ」

「今日のご飯ステーキだよ。米を使ったステーキ」

勝人と別れ、大学に合格し、わたしは新生活に向け準備を始めた。そうは言っても大学は家から通える距離にあるので、入学式に着るスーツや大学に着ていく服を買ったりするぐらいのものだ。

高校生でも大学生でもない宙ぶらりんな時期。人は「身分」がないと戸惑ってしまう。身分があれば楽だからだ。素の自分をさらけ出す必要はない。学校にいる自分、会社にいる自分、家族の中の自分。

それらを演じ分けて人は生活している。それなら素の自分はいつ見せるのか。答えは簡単だ。見せることはない。面倒くさいからだ。正確に言うと素の自分を見せて、もし他人から受け入れてもらえなかったとき、どうしたらいいか途方に暮れるからだ。

だから状況に合わせて自己を見せる。受け入れてもらえるように。窒息するから、深くは潜らなくていい。海面をふかふか浮かんでいればそれでいい。

わたしもそのとき身分を求めていた。大学生活にそれほどの期待もなく、「大学生」という身分が欲しかった。

けれどその前にわたしは、とんでもない身分を与えられてしまった。

意識しだしたのは、酸っぱいものが無性に欲しくなったり、吐き気をもよおすことがあったからだ。あまりにも分かりやすい症状に怪しみつつも、わたしはほうっておいた。そもそも妊娠したということに現実感がもてなかった。

そうしているうちにお腹が膨らみ始め、いよいよこれは妊娠かもしれないと覚悟したとき、最初に浮かんだのは勝人のことだった。これまでセックスの経験は彼としかない。間違いなく勝人の子だ。

どうすればいいのか見当がつかなかったし、相談も誰にすればいいのか分からなかった。

父に告白したらどうなるのだろう。受け入れてくれるかもしれないし、罵倒されるかもしれない。何にせよ、何か道標となるものは与えてくれるだろう。

それでもわたしは、打ち明けることはなかった。なんでも解決してくれそうな父の言葉がその頃は怖かった。ずっとその言葉に、盲目的に従いそうな気がしたからだ。

正しいとか正しくないとかではなくて、曲りなりに自分の答えを出したかった。だからわたしは勝手に自分の結論を出した。無謀で、無責任で、浅はかなものだ。

「わたし子ども産むから」

ある日の夕飯のあと、意を決して発した言葉は、意気込んだ割には軟弱でかすれて、うわずったものになった。幼い頃に、わかめちゃんの声優になると言ったときの情景が目の前をよぎる。

昔わたしと父とどちらが柔らかいのか比べたことがあるのだが、勝敗は父が腰を無理に曲げようとして痛めてしまうという、あまりにも悲しい形で決した。

それ以来父は風呂から上がったあとストレッチをする。柔軟運動は風呂上りがいいらしい、という情報をどこからか仕入れてきて鼻息も荒く、鍛錬を開始した。

床に座り、両足を広げて上半身を折り曲げようとするのだが、どうにもうまくいかない。まず手が床につかないから、まだ首が据わっていない赤ん坊のように見えてしまう。

「んー？」重い荷物を持ち上げるときの、呻くような声だった。

「子ども産みたいの。産んで、育ててみたいの。馬鹿なことを言ってると思う。でも本当に軽い気持ちから言っているわけじゃなくて、わたしのなかに命があってそれを消したくないの。育て上げて見せるから。お願いします」幼かったのだ。無知で、後先を考えないで口先だけで。わたしが子どもだったのだ。でも実際に子どもだったのは父だったのかもしれない。

「翔子がそう言うなら、産めばいい」

「え、ほんとに？」

「家族が増えることはいいことだ」

父はわたしが身ごもっている子どもの父親のことを訊かなかった。優しく問いただすこともすれば、怒りにまかせて無理に訊くこともできたはずだ。

けれどそうしなかった。嬉しかった。無関心とか怖いという感情ではなくて、わたしのことを全て分かっていて受け入れているようだったからだ。太陽の光をたくさん浴びてふわふわになった布団めがけて飛び込んだようだった。それはわたしの形に凹んで、包み込んでくれる。

月日とともにお腹が膨らんでくる。わたしの中のもう一つの命の存在はだんだんと増していく。不思議だった。やがてこの命は産み落とされて、成長して生きていくのだ。

身が引き締まる思いがした。楽しく生きてもらいたい。人に愛されるとか頼られるとか、そんなのどうでもいい。平凡というありきたりな毎日を過ごしてもらいたい。それがとても幸せなことに気づくのは、あとでいい。

その日もわたしは、家でおとなしく父が買ってきた胎教にいいCDとやらを自室で聴いていた。初めて聴いた曲なのだが、穏やかなテンポで水だけでできたベッドに身を横たえているような安心感が体内に満ちていくのを感じる。

このところ父はまだ赤ちゃんが生まれてもないのに、ベビーベッドやら洋服やら準備に大忙しだ。この前も熊のぬいぐるみを買ってきて、どう生まれてくる赤ん坊と遊ぶかシミュレーションをしていた。

わたしの部屋はそれらに埋もれていって、いやがおうにも雰囲気は高まっていく。そのとき、少し痛みを感じた。始めは朝飲んだ牛乳のせいでお腹の調子が悪くなったのかと思っていたがどうやら違うようだ。痛みは治まりそうにない。顔をゆがめて思わずその場にうずくまる。ゆっくりとした音楽が今度は逆に耳に障る。助けを呼ぼうとしたが今日も父は、オムツを買いに行くといって朝早くに出ていった。

だから気がはやすぎるんだって。気を失う寸前に、これは陣痛なのだ気づいた。

目が覚めてまず、木目をさらけだしている天井が見えた。子どもの頃眠れないときに見つめていたそれは長い竜の胴体のようにも、仙人が住んでいそうな細長い山のようにも思えてきてよけいに眠れなくなったものだ。左手に父がいた。絨毯にじかにあぐらをかいて座っている。どことなく疲れているようだった。

「お父さん」

「お、よく眠ってたな」

「わたし、どうしちゃったの？」

「びっくりしたぞ。帰ってきたらお前が倒れてたんだから」
「音楽聴いてたら、急にお腹が痛くなってきちゃって」そう言ってお腹に手をやって初めて重くて仕方なかったお腹が、もとに戻っていることに気づいた。

「お父さん、赤ちゃんは」

「ああ、あのあと、お前を病院に運んでー」

「もしかして」そのあとは続かない。あんなに出産を待ち望んだわたしの子どもが、流産したなんて信じられなかった。「ねえあたしの子どもは」

「おいおい落ち着けよ」

取りすがった父の背後に見えたのはベビーベッドに眠る、赤ん坊の姿だった。ベットから降りて急いで駆け寄った。なんてかわいいんだろう。わたしの体から生れ落ちたものだと到底信じれなかった。

「お父さん！」

父は一瞬きよとんとしたあと、おう、とだけうなずいた。

名前は明人と名づけた。性格が明るいだけでけっこう人生は楽しいものだ。父の奮闘ぶりはある程度予想はしていたのだが、すごかった。オムツの取替えや、食事、遊びにいたるまで、全てを完璧にこなした。わたしの仕事と言えば、母乳を飲ませてやることぐらいだ。

「仕事、大丈夫なの」

「こんな大切なときに仕事なんてやられるか？」

「え？もしかして仕事辞めちゃったの」

「心配するな、明人が一人前になったら、また始める」

「一人前って、すごい漠然としてるけど」

「明人が俺を超えたらだ」雄々しく宣言するのだが、明人を抱えながらなので、あまり様にならない。

明人はいつもはしゃいでいて父やわたしを困らせた。わたしは育児のつらさを実感していたのだが、父にそういう素振りは一切見えない。夜泣きで途方にくれているときも父はわたしから明人をそっと取り上げてあやしてくれた。

「わたしも夜泣きすごかった？」

暗がりの中で父にそっと囁く。

「ああ。あれは明人よりすごかったなあ。頭にズーンとくる泣き声だった」

明人が泣き叫ぶなか父もまた小さい声で応える。

「毎日大変だったでしょ」

「まあな。でも」そこで腕から這い出ようとする明人を抱えなおして「生きているっ、て主張してんだなあと思ったよ。必死で泣いてさ、自分はここで生きているよって。だから確かに明人も生きている。ここで必死に生きている」

「そうだそうだ」

泣き声やんだと思ったら、明人が交互にわたしと父を見ていた。涙がたまった二つの眼が、窓から差し込む月明かりに照らされ輝いていた。

あるとき父とわたしと明人と三人で動物園に行ったときがあった。そこまで規模がある施設ではなく、わたしも小学生のときに遠足で訪れた以来だった。なぜここに来たのかと言うとそれは父の突然の発言にほかならない。

「明日、『ふれあい動物園』にパンダがやってくる」仁王立ちで腕を組み、わたしと明人を深刻な顔つきで見つめる。「いざ行かん、動物園に」

「はあ……。でもお父さん動物好きだったっけ」ジャラップ事件以来、父は犬に限らず動物に警戒心を抱いていた。

「パンダは違う。見るもの全てを魅了するあのつぶらな瞳、絶妙のバランスで生えている黒と白のツートンカラーの体毛、そして優しく私達を受け止めてくれるであろうあの豊満な姿態。完璧じゃないか」

ただただ圧倒されているわたしを尻目に、明人はいきなり身振り手振りで話し始めた父を見て奇声をあげはしゃいでいた。

そのようないきさつでふれあい動物園にいるわたし達だったがやはりパンダの人気は絶大なものだった。檻の前はパンダ目当てでやってきた人々でごったがえし、そこだけがにわかには活気づいている。なにせ肝心のパンダの姿さえ確認できないのだ。

開園して間もないのに、この多さは父も予想していなかったのだろう。目に見えて焦っていて「なんでみんなこんな早くから来ているんだ」と自分のことを柵にあげて怒っている。「何も見えないじゃないか」

「お父さん、何か他の動物を見ようよ」

「だめだパンダを見に今日は動物園にきたんだぞ」ほとんど泣き声に近い声で父は主張する。

「だって全然見えないじゃん」

「こうなったら……」明人を肩車して、無理に人ごみの中を進む。

「ちょっと、お父さん」

そのとき頬に冷たいものが当たった。空を見やるとそれまで雲ひとつなかった快晴の空はどんよりと曇っている。

それまでパンダに夢中になっていた人々は雨に気づくと、それぞれに避けられる場所を求めて散っていく。

「今だ」

「明人が濡れちゃうよ」

わたしの言葉には耳を傾けず、父は明人を高い高いしてパンダを見せている。ほおら、すごいだろ明人、黒いだろ、白いだろ、パンダは。明人は、だーとかあーとか何かを必死に言おうとしている。

周囲の人々は何事かと奇異の眼差しを向けていた。わたしの脳裏にはシャラップの一件が蘇っていた。あのときはとても恥ずかしかったけど今から思えばそれは、触るには柔らかすぎて、置いておくにはあまりにも体をなしてなくて、だけどもとても暖かい存在感を放っている大切な思い出になっていた。

雨はさらに勢いを増し、わたし達に降り注いでくる。服が肌と同化するかのようになり張り付いてくる。でもそんなことはどうでもよかった。父がいて、明人がいて、わたしがいる。三人でパンダを見ている。父は全力でわたしを、明人を愛してくれている。しかもそれは倒れる者をとっさに受け止めるように、前の人が落としたハンカチを拾うように、自然にできているのだ。傍から見たら父は異常に見えるかもしれない。それが何だと言うのだろうか。そのときの父は赤ん坊の笑顔のように、説明の余地がないほどわたし達に幸せを与えていたのだ。

＊

明人を寝かしつけてからはわたしは夏の早朝に吹く風のように、優しく包んでくれる記憶の海に体を浸していた。はるか頭上に燦然と輝く父との思い出。一方でその光さえ届かない深海で息を潜めているわたしの現在。

しかしこの世にずっと輝き続けるものはないように、父とわたしと明人の共同生活もささいなことで終わりを迎えた。

その日は昼食後に三人で遊んでいた。遊ぶといっても明人がハイハイでわたしと父の間をひたすら往復するというものだったが、その頃のわたしには手を床につきゆっくりと向かってくる明人が、希望を携えているサンタクロースのようにも見えていた。

「あーくん、よくできたねえ。はいはい上手ですねえ」明人を抱きかかえ、ふと父を見た瞬間驚いた。いや、そんな言葉で説明がつかないくらい父のその行動にわたしの心は悲しい音を響かせた。

父は一瞬、あの動物園にいた人々のように奇異の目でわたしと明人を見たのだ。侮蔑と少々の憐れみがこもった対の眼球で。そのあとはすぐにいつもの笑顔に戻った。

しかしそんな取り繕った笑顔に、なんの意味があるというのだろうか。わたしはヒーローが、背中のファスナーを開ける場面に遭遇した気分だった。

とにかく頭が混乱して呼吸することさえ忘れそうになった。鉄の塊のように重くなった身体をどうにか動かし、明人を連れて家を出た。それからの記憶はない。気づいたら今の生活が田舎で見た、どこまで続いていると知れない一本道のように無愛想にわたしの眼前に続いていた。

明人が泣いている。すぐ近くで泣いているはずなのに、なぜか遙か遠くに聞こえる。

「あーくんどうしたの。何で泣いてるの。さっきミルクあげたじゃない。オムツも取り替えたじゃない。ねえお母さんに教えて。何で……何で……」

泣いている。明人が泣いている。耳を押さえても声はどろどろとした液体のように入り込んでくる。

「あーくん、静かにして。ね、静かにしよっか。ちょっと声出すのやめて。お母さんあーくんの泣き声聞きたくないから」

枕を明人の顔に押し当てた。こうすれば聞こえない。

「静かにして静かに……。あーくんいい子だから、できるよね、ね？」

枕がすごく濡れていると思ったら、自分の涙だった。明人は気づいたら動かなくなっていた。

「あーくん？ねえあーくんどうしたの？あーくん！」

どれだけ身体を揺さぶっても、再び動き出す気配はなかった。心臓も鼓動していない。

殺してしまった！わたしは自分の子供を自らの手で死なせてしまった！

「どうしよう……。わたし、どうしたら」

体中の震えが止まらない。自然と手が電話機に伸びていた。確実に覚えているはずなのに何度も間違えながら、やっとその番号を押すことができた。

翔子から電話がかかってきたとき、河村英子は一種の儀式にも似た行為の途中だった。ご飯、ハンバーグ、コンソメスープ、サラダ。独り身とは思えない料理が、二人分食卓に並ぶ。

英子の向かいの席には写真立てがある。一人息子だった。写真いっぱい広がるあどけない笑顔が反対に、彼の短い一生を際立たせていた。

毎晩二人分、多くの時間を費やして作り上げる。長く生きれなかったぶんだけせめて食事はいい物を供えたかった。

そして英子は二人分食べる。途中からは何度も口の中にあるものを吐き出しながら、泣きながら食べる。短い間だが自分のお腹にいたのだから当然だ。これにも長い時間を費やす。

大丈夫。あの子は笑っている。私はこれからも生きていける。あのときに犯した罪を忘れずにやっていける。

やっと半分食べたところで電話がかかってきた。

「もしもし。翔ちゃん……。どうしたの？え……。殺した？」

翔子がそんなことをするなんてありえない。英子は最初に明人を預かったときのことを思い出していた。なおも翔子は完全に取り乱した口調で息子の名前を連呼している。

「すぐにそっち行くから。そこに居て」

受話器を置き、急いで玄関に向かう。とっさにテーブルのほうを振り向いた。写真の中はまだ笑顔でいっぱいだった。

ドアを開けた瞬間翔子が英子に飛びついてきた。意外に華奢な体つきだった。

「河村さんどうしようわたし殺すつもりはなくて気づいたら動かなくなってるねえ河村さんー」

「翔ちゃん、落ち着いて」

間近に見た翔子の顔は泣き腫らしていた。まだ涙が流れ続けている。

「だって明人動かないんだよわたしどうしたらいいかわかんなくてやっぱり死んじゃったのかなってでも殺すつもりはなくて」

「翔子！」

涙で潤んだ瞳が、霧が晴れたあとの湖面のように英子をくっきりと映しだした。

「翔ちゃん、あれは明人君でも人間でもないの」

明人の面倒を見るために初めてこの部屋を訪れたときのことを英子は鮮明に思い出す。自分が守らなければいけない。この子は私のようになってはいけない。

「これは、ぬいぐるみよ」

一瞬翔子の身体の動きが止まった。

「河村さん何言ってるの……。？そんなわけないじゃない！」

英子はゆっくりとベビーベッドに置かれている「明人」を抱き上げ差し出した。
「よく見て。……ねえ翔ちゃん違うでしょ？」
翔子は操り人形の糸が切れたようにその場に崩れ落ちた。生まれてからこれまでの明人との思い出が、何枚もの写真を連続で見せられるように目の前を強烈な光を伴ってよぎっていった。
「そんな……でも……違う……明人は……」
眠気にも似た心地よい感覚が、翔子の意識をどこかへ連れ去っていった。

*

久しぶりに訪れた故郷は、相も変らぬ姿でわたしを迎え入れてくれた。父と散歩したこの河原ももちろん変わっていない。来たついでに石投げをしたが、これも昔のように全然飛ばずに、哀れわたしに選ばれてしまった石ころは何もできずに沈んでしまった。
シャラップの様子も見にいったが、そこには主がいない犬小屋があるだけだった。そういえばシャラップは犬小屋では寝ずにいつも地面に穴を掘って眠っていた。歳月を考えればとくに寿命を迎えているのが自然なのだが、きっと散歩にでも行っているのだ。
意識が戻ったあと、河村さんはわたしの父と別れてからの真実を何かを噛みしめるかのようゆっくりと語ってくれた。
「翔ちゃんちに初めて行ったときはほんとにびっくりした。だってぬいぐるみを私に大事そうに渡して、面倒みててくださいって言うんだもの。でも本当のことは言えなかった。あなたが『明人』君のことを心から愛しているように見えたの。それ以来翔ちゃんは私が守らなければならぬって心に決めたの。……何でそこまで考えるのか不思議でしょ？実はね私も自分の子供を殺したの」
そこで河村さんは虚空に顔を向けた。懐かしそうに目を細めているが、その視線は鋭かった。
「旦那と別れたばっかりだったし、いろんなことが身の回りであって子育てがおざなりになっていたんでしょね。なんで自分だけがこんな目にあうのだろうって独りよがりな気持ちにもなった。もうどうだっていいやって」
「……」

「その日は息子の篤志がとても静かだった。リビングの隣の部屋に寝かせていて、様子を見ようと思えばいつでもできたんだけど、私はそれをしなかった。きっと気持ちよく寝ているんだろうって自分に無理やり言い聞かせていた。そうしてたっぷり時間が経ったあと篤志を見たら、死んでたの。うつぶせになってて、窒息死だった」

「でもそれは」

「いいえ、私が篤志を殺したの。様子を見るのはいつだってできた。私がこまめに気をくばっていればあんなことは起こらなかった。自分を責めたわ。何日も何日も泣いてその日が過ぎた。当たり前かもしれないけど、篤志とのいい思い出ばかりが頭に浮かんで。それで気づいたの。ああ私はあの子に生かされていたんだって」

そこで河村さんはわたしのほうに引き直った。

「翔ちゃん、あなたはまだやり直しがきく。このことはあなたにとって、すごくつらいことだったでしょうけど、まだこれからなのよ」

「河村さん」

「うん」

「わたし謝らなければいけない人がいるんです。恥ずかしいんですけど、河村さんにそのことを教えてもらったんです。今からその人の所へ行ってきます。その人も待っていると思うんです」

河村さんは話を聞いている間虚を衝かれたようだったがすぐに、行ってきなさい、と笑顔で言ってくれた。

「でもいきなり行ってその人驚かないかしら」

「大丈夫です。驚いていたのはいつもこちらのほうでしたから」

そしてわたしは今我が家の玄関の前にいる。どこにでもありふれた二階建ての一軒家なのに、今までどこに行っていたんだと言うように睨まれているようだ。

恐る恐る呼び鈴に手を伸ばす。心臓が半分になるような心持ちとは裏腹にチャイムは呆けた音を室内に響かせた。

父は出てこない。どこかに出かけているのだろうか。最悪どこかに引越しているかもしれない。それくらい自分はひどいことをしたの

だ。あんなに能天気な父でもショックを受けたに違いない。
もう一生会えないかもしれない。父との今生の別れさえも覚悟しかけたとき、何かがわたしの後ろを猛スピードで通り抜けていった。

父だった。

両手を一回転するかのごとく振り、脇目もふらず疾走している。その後ろにぴったりとくっくくようにして追走しているのは一。

「シャラップ！まだ生きてんだ！」

わたしは急いで父の隣に行き、並走する。

「なんとかしてくれ翔子」

そう言いながらも案外父はこの状況を意に介していないようだった。楽しそうでもある。

「何でまた追われてんの」

「最近ぼけているんだシャラップは。昔俺にこらしめられたことを思い出しているんだろうな。老犬は若き日の残像を求め、駆ける」

「何言ってるの」

「そこ！」

父はいきなり方向転換をし角を曲がる。そうして父についていっていると、いつしかシャラップの姿は見えなくなっていた。

「慣れてる……」

「ざっとこんなもんだ」

腰に手をあて誇らしげに胸をはる。私たちは左手にそびえ立つパチンコ屋を見ることが出来る場所に来ていた。そびえ立つというのはパチンコ屋が西洋の城のようなたたずまいだったからである。完全に周囲の建築物から浮いている。

駐車を囲むようにして植えられている木の陰に隠れて、父はある一台の軽自動車の様子をうかがっている。

「何してるの」

「もう三十分もたつんだ」

「え？」

「なかに子供がいる。まだとても小さいのに」

太陽は今や空の一番高い位置にあぐらをかき、容赦なく熱線を放っている。寒くなれば感謝をし、暑くなれば嫌悪される。太陽は毎年の正反対な心変わりやどう受け止めているのだろう。

「助けに行く」

父はすぐに車のもとにたどりつき、鍵をこじ開け始める。

「ちょっ、何やってんのお父さん！犯罪だよ！」

「犯罪者になってもいい。この子を助けられたらそれでいい」

鍵が開いた。車内にいた女の子は思わぬ侵入者に狂ったように泣き叫んでいる。もう一度わたしは父を止めようとしたがやめた。車から吐き出された熱気に息を呑んだのだ。これでは一時間と持たずに脱水症状がでるだろう。大人でも耐えられそうにない。

「行くぞ」

そのあとわたしたちは、近くにあった公園の日陰にあるベンチに腰を落ち着けた。どこから取り出したのか、父は女の子にジュースを飲ませている。女の子のほうもやはりそうとう喉が渴いていたのだろう、泣き腫らした目をいっぱい広げて飲んでいる。

「こんなに汗をかいて。でも身体に異常はないみたい」

「ああ。救出成功だ」

目の前にある噴水では、子供たちが服が濡れていることお構いなしに遊んでいた。蝉のみーんみーんという鳴き声が何度も頭の中で反響している。

「翔子」

「なに？」

「明人は元気か？」

「……お父さん、わたし明人を殺しちゃった。あんなに愛していたのに。……それで……それでわたしほんとはぬいぐるみをずっとね……お父さんにひどいことして……」

「お前があやまる必要はない。父さんは翔子が戻ってきたんだからそれでいいんだ」

「でもわたし」

「翔子は受け入れようとしたんだ。自らの目で子供はいなかったという現実を確かめるために。それでも翔子がやったことを罪だと責める奴がいたら」

こちらを向いた父はいつもの笑顔だった。どんな代償も払わずに、気が遠くなるような安心感を得られる、ほんとに種がない手品。

「喜んで犯罪者になってやる。こんなことしてんだ。俺だって立派な犯罪者だろう？自分の娘の味方にもなれなくて何が親だ」

そのとき、わたしの身体の中でカチッと音が鳴った、気がした。心というものがどこにあるのかは分からないが、とにかくそこに照明が灯ったようだった。これで心の隅々まで見渡せる。

暗がりでは分からないだろうが、案外ライトで照らしてみれば、ちっぽけだったりするのだ。それを複雑な厄介なものにしていたのは、自分自身だったのだ。

「最近よく思うんだ。どんなつらいことも笑い飛ばせればいい。がはは、と笑って終わり。もうそのことについては考えない。それがどうしたのって勢いで」

「うん」

「だから今回のこともそれでおしまいにして。がはは」

「がはは」

女の子は今では小さな寝息をたてている。炎天下での車内に放置されたり、さらわれたり、今日はこの子にとって特別な意味を持つに違いない。

「ところで翔子に聞きたいことがあったんだ」

「何？」

「まだわかめちゃんの声優になる気あるか？」